スタッフの紹介したいこと

本会の運営委員であり、冒険学校、ちえのわ農学校でもスタッフで活躍した「まーしー」＝ 横山昌佳さんの小説が「山梨日日新聞」に 2025 年と 2024 年に連続して掲載されましたので紹介します。

山梨日日新聞　2025年（令和7年）1月6日　月曜日

山日新春文芸

小説佳作3席

川上　健一選

ざらら

横山　昌佳

青過ぎるだろ、空。

江口はキャンプ場にある四阿に腰掛けて、空を見ていた。中には囲炉裏があり、弱く火がくべられている。串に刺された飴色のヤマメは、ぐぁ、って、死んだときそのままの顔付き。いや、違うか。無理矢理、がっとロを開かれて、ずぶずぶと竹串を刺し貫かれるんだもんな。ひでェよな。

江口は、もう何度目かでため息をつきながら、ぐんにゃりとうなだれた。あれだろ。悠々と養魚場の水槽で泳ぎ回っていたのに、ん、何だあれうわうわ、って思ううちに掬い上げられてさ。ぎゃーっ、つって苦しみ息絶えた後に、活きがいい魚でございー、ってな感じで、うねうね串に打たれるわけだから。

浮気されたってだけでも死ねたのに――

一方的に離婚って――

「おーい、コージン。滝行くけど、行く？」

がたがたん、と砂利道の坂を軽トラックが下りてきて、中から治恵が声をかけた。ぼさぼさの髪に、日に焼けた顔。細い目は、笑うとほとんど消え失せてしまう。

「あ、滝？」

「うん、白糸の滝。来週キャンプだから、その下見に行くの」

言われるままに江口は立ち上がると、軽トラックの荷台にひょいと飛び乗った。本当はいけないのかもしんねェけど、ま、誰も見るわけじゃないし。江口は荷台にべたんと尻を下ろすと、また空の青を見上げた。

昨日、江口はこの山梨県小菅村にやって来た。自分の家でも、実家があるわけでもないこの村は、今のところ江口が逃げて来られる唯一の場所だった。東京から、青梅街道を抜けて二時間半。車には載せられる荷物を全部載せてきた。着替えとか、毛には、小島がきっと安心して巣を作るだろうから、と。

都内に中古のマンションを買って、二人で住み始めた。初めはもちろん順調だった。日本海までドライブに行ったり、IKEAで必要もない家具を買ったり。江口の帰りが遅いのは仕方がないことだった。システムエンジニアである江口は残業も多い。でも、そんなことは問題がない、はずだった。

半年前に、少し長の出張に行って、その辺りから少しおかしくなった。あいつだよ。取引先の、年下の営業。もともと、ああいうチャラい奴と付き合っていた過去があったんだよな。もっと警戒するべきだった。そいつと、いつの間にかもう抜き差しならぬ関係になっていて、ああマジかよ、じかに現場を目撃する羽目に陥るなんてな。

「やり直そう。俺が悪かった。今度からは」

「……ごめんなさい」

「許すって。だからさ、もう一度」

「ごめんなさい。もう無理なの。心が……」

こういうのって、普通は相手の方が謝ったり、すがったりするもんじゃねェの。それをあいつ、取り付く島もなく突っぱねた。悔しいことにはさ、そんな瞬間にも、やっぱりあいつのこと好きだなとか、キレイだなとか思うわけ。慰謝料？　うん。もらったよ、もちろん。でも、だからって、じゃあ良かったねってことにはならないだろ。

がたん、がたんごとん、と、砂利道の坂を登り切って、森林を切り抜いた道路を走っていく。両側は杉林だ。すっかり枝を落としているところもあれば、うんと密生しているところもある。風で、江口のもじゃもじゃした髪が巻き上げられる。大丈夫。小島の巣はない。ふいに、にも所属して、何かと頼りにされているらしい。

どちらも、江口が学生の頃からの知り合いだ。パソコンに向かい合う毎日が嫌で、友達が関係していたこのNPOの仲間に入れてもらった。それ以来、年に何回かはここに訪れている。子供たちの相手は、まあ、あんまりできないけど。でも、ターブ張ったり、薪割ったり、するべきことは色々とあるからね。

「んー、水量はいまいちだね。最近、雨降らないから」

ちょっと釣りない感じで流れる滝を見ながら、治恵が腕を組んだ。まあ、それならそれで、滝壺もあんまり深くないわけだし。

「どぼーん、って俺、あんまり好きじゃないんだよね。頭びしゃびしゃになるし」

「乾かなそうだもんね。コージンは」

「うるせェな」

けけけっ、と治恵は笑って、すぐまた道を引き返し始めた。

コージン。江口の名の幸人を、治恵たちは音読みしてコージンと呼ぶ。江口には、それがかえって気楽に感じられた。今の自分は、どう考えても幸せな人ではない。コージン。そう、ここにいればコージンでいられる。

（2025 年１月６日　山梨日日新聞に掲載・画像は全文ではありません）

山梨日日新聞　2024年（令和6年）1月6日　土曜日

山日新春文芸

小説佳作3席

川上　健一選

三連星（みつらぼし）

横山　昌佳

世界は一枚の画面だ。

川から突き出た岩に寝そべると、視界のほぼ全てを空が占めた。雲の少ない冬の空だ。ざあああっ、と流れる水の音と、ごぼっ、ごぼごぼ、と低く響く泡の音。甲斐は清く冷たい空気を身に沁みて感じながら、この空と大音量のサウンドがパックなら、一万イイね！　は固いのにと考えていた。

山梨県小菅村。東京から青梅街道を抜けて、多摩川沿いにひた走る。美しい水と山女魚、そして近年はキャンプ場を目当てに来る客も多い。各集落は高齢化と人口減に悩まされてはいるが、都心からのアクセスの良さもあって、初夏や紅葉の時期は賑わいを見せる。

ここの魅力を発信する！

ある日、著名なユーチューバー「シャイン☆mass加藤」の配信を見ていた時、突如として甲斐は思い至った。それこそが俺の使命なんだ。いい動画を撮って、流行の音楽と共に流せば、きっと見てくれる人はいるはずだ。

初めは自分の大好きな、村を貫く川沿いの坂道を撮影した。見晴るかす山、森、ところどころ切り拓かれた畑。夏の夜にはカブト虫の来る街灯。「ドライブにはもってこいですよ～。俺免許持ってないけど」とナレーションも交えて、なかなかの映像が撮れた。早速、ネットでやり方を調べて編集、公開した。

３イイね！　だった。

一つは従兄弟、一つは誰にでもイイね！　をして回るおじさん、そして幼馴染みの亜美だった。甲斐は舌打ちをした。昔はよく一緒にカジカを突いたり、橋で夕焼けを見たりしたのに、彼女が村役場に勤めてからは少しも遊ばなくなった。

「あんた、ちょっと何やってんのよ」

そう思っていると、本人から電話が来た。

「養魚場のバイトはどうしたのよ。

う彼を無愛想に見せた。夏は黒いTシャツ、冬は黒いパーカー。山道を歩いていたら、一度本当に熊と間違われたことがある。

川の岩から身を起こして、河原へ戻る。ここの風景を撮ろうと思っていたが、やっぱりやめた。また、どうせ十人くらいに見てもらえるだけだから。甲斐は釣り師みたいにじっと立っていたが、冷えてきたので歩き出した。もう日は暮れかけている。

「道路から見える山桜まで登ってみた」「今夜羽化しそうなセミ」「ただの夕暮れ」「なら茸探したけど大体が謎キノコ」。自分の好きなものが、皆も好きというわけじゃない。だけど、配信したいのは、自分の好きなものたちだけだ。紛れもないこの村の魅力。それがどうしても伝わらないとしたら、この行為にはたして意味はあるのだろうか？

ブォウン、

とエンジンの音を立てて、青いスポーツカーが走り過ぎて行った。思わず目で追う。金はないが、いつかはあんな車に乗ってみたい。

十二月三十一日。横目に見る家々の門に、門松や何かが飾り付けてある。数年前まで帰省してきた小学校の同級生たちは、それぞれ東京や他所で年末を過ごすようになった。深夜に何か配信する他に予定はない。甲斐は家に帰ると、祖母に言いつけられて大掃除の手伝いをした。夕食は煮物と年越しそば。祖母はテレビで紅白を見始めた。

よし。

「山梨県の山奥で静か過ぎる年越し～令和六年だから流れ星六個見たい」と題して、家を出た甲斐は配信を始めた。暗い夜道をぽつぽつと街灯が照らしている。寒い。断続的な闇の中を、温泉施設を備えた道の駅へと向かった。駐車場で夜を過ごす人が時々いるから、できたら声を掛けてみようと思ったのだ。

ぐるりと半円を描くカーブを上って、目指す場所へと来た。照明はなだ。年齢は三十代半ばだろうか。

「あれっ。もしかして、シャイン☆mass加藤さんじゃないですか？　ユーチューバーの」

「……いや」

「俺、ファンなんです。そういえば、青い車に乗っているって、先々週か何かの回で言っていましたよね。いいなーって思ったんですよ。これがそうなんですね！」

甲斐は戸惑う男を尻目に、しげしげとスポーツカーを観察した。暗くて分かりづらいが、革張りらしきシート。バック・ミラーに吊るされているのは、ブドウを模したマスコットだ。加藤は、シャインマスカットの親善大使にも任命されている。

ふと、甲斐は助手席にある七輪に気が付いた。ごく普通の、真新しい七輪。ダッシュ・ボードには白い封筒も置いてある。

「あっ。加藤さん、これで暖を取るつもりだったんですか？　いいですよねー、七輪。餅も焼いたりします？　良かったら俺、家から」

「焼かない」

「あ、うーんと……これ！　お手紙書いていらっしゃったんですか？　やっぱり、こういう場所に来ると、誰かに手紙書こうかなって」

「……それ、遺書」

（2024 年１月６日　山梨日日新聞に掲載・画像は全文ではありません）

全文を読むには、山梨日日新聞のホームページから「バックナンバーのお申込み」で紙面を取り寄せるぐらいしか方法が無さそうです。